

研究成果報告書

(国立情報学研究所の民間助成研究成果概要データベース・登録原稿)

研究テーマ (和文) AB		俳句を通して人々に親しまれた植物の変化			
研究テーマ (欧文) AZ		Changing Tastes in References to Plants in Haiku from the Edo Period until Today			
研究氏 代表 者	カカナ CC	姓)ジャンボール	名)キヌコ	研究期間 B	2007 ~ 2009 年
	漢字 CB	ジャンボール	絹子	報告年度 YR	2008 年
	ローマ字 CZ	Jambor	Kinuko	研究機関名	国際俳句交流協会
研究代表者 CD 所属機関・職名	ジャンボール 絹子 国際俳句交流協会 翻訳委員				
概要 EA (600字~800字程度にまとめてください。)					
<p>俳句は環境から得られた情報評価の結果の一つである。その情報がどのような植物で成り立つかは環境情報を科学的に研究するうえで大切なことと思う。人々が日々の生活の中でどのように周囲の事柄、つまり環境とかがかわってきたかを俳句を通してその関心を明らかにするのをこの研究の中心にする。既往研究「季題数の変遷」(宇多久氏、井本濃一氏)から季題全分野で画期的な季寄せ集として人気があった『山の井』(北村季吟著、慶安元年(1648))を初め代表的な俳諧作法書から、季寄せの種類、そして現代の歳時記の基になったといわれている『俳諧歳時記葉草』(滝川馬琴著、青藍補嘉永4年(1851刊))などの調査から全期題分野で6倍の季語増加が示されている。本研究ではそのような状況の中で植物季語の様子を江戸期の代表的な俳諧作家松尾芭蕉(1644-1694)、与謝蕪村(1716-1783)、小林一茶(1763-1827)の作品を通して植物を詠んだ句を調査した。この3者の合計発句9161句にたいして植物が詠まれているのは2171句で24%をしめていた。</p> <p>芭蕉、蕪村、一茶の作品から春では「花」、「梅」、「柳」、「菜の花」。夏では「瓜」、「麦」、「昼顔」、「牡丹」。秋では「菊」、「萩」、「朝顔」、「紅葉」。冬では「水仙」、「帰り花」、「落葉」、「冬木立」のように使用頻度の様子が分かった。</p> <p>芭蕉頃から使用初められた植物季語は「姥桜」、「鬼薊」、「茄子」、「柿」、「蜜柑」、「林檎」、「葡萄」、「実桜」、「西瓜」、「曼珠沙華」、「蒲公英」、「南瓜」、「サボテン」などが目立つ。</p> <p>明治以来の植物使用の様子を知る手掛かりに『図説角川大歳時記』(1973年刊)の植物季語を調査した。編者の趣向によるため完全な結果とはいえないが句例の多いものでは春は「桜」、「梅」、「木の芽」、「椿」。夏は「牡丹」、「麦」、「若葉」、「芥子の花」。秋は「菊」、「萩」、「柿」、「朝顔」。冬は「落葉」、「枯木」、「冬木」、「水仙」などである。正岡子規のころから俳諧の発句は俳句、季題は季語と呼ばれるようになった。</p> <p>現在の植物季語約1850語について植物名の場合は分類が学的単位である種を基礎とし、栽培植物名の場合は品種を基礎として分析した。その結果ほぼ半数が分類群であり、約1割が農作物および園芸作物であった。また、ひとつの和名が複数の異なった種や品種をしめすことがあり、植物の実態を特定できない季語のあることが明らかになった。種や品種の学名を明らかにすることによって環境問題にアプローチする手掛かりが得られた。また、気候風土の異なる諸外国において、俳句を通して人々はどのような植物と接しているかを調査中である。現在までに7カ国から68人の回答が得られている。</p>					
キーワード FA	俳句	植物季語			

(以下は記入しないでください。)

助成財団コード TA					研究課題番号 AA								
研究機関番号 AC					シート番号								

発表文献（この研究を発表した雑誌・図書について記入してください。）									
雑誌	論文標題 ^{GB}	Botanical Season Words in Basho, Buson and Issa Changes in Botanical Season Words during the Edo Period							
	著者名 ^{GA}	ジャンポール 絹子 青木陽二	雑誌名 ^{GC}	Journal of Environmental Science					
	ページ ^{GF}	~135-140	発行年 ^{GE}	2008	March			巻号 ^{GD}	Vol. 36, No. 5
雑誌	論文標題 ^{GB}								
	著者名 ^{GA}		雑誌名 ^{GC}						
	ページ ^{GF}	~	発行年 ^{GE}					巻号 ^{GD}	
雑誌	論文標題 ^{GB}								
	著者名 ^{GA}		雑誌名 ^{GC}						
	ページ ^{GF}	~	発行年 ^{GE}					巻号 ^{GD}	
図書	著者名 ^{HA}	ジャンポール絹子、近田文弘、青木陽二							
	書名 ^{HC}	俳句—植物季語を斬る（仮題）							
	出版者 ^{HB}	永田書房	発行年 ^{HD}	2009	March			総ページ ^{HE}	250(予定)
図書	著者名 ^{HA}								
	書名 ^{HC}								
	出版者 ^{HB}		発行年 ^{HD}					総ページ ^{HE}	

欧文概要^{EZ}

Haiku is one of the most important information obtained by the experience of environment (Aoki 1995). The Haikai poetry of the Edo Period inherited the use of season words or Kigo(季語) the linked poetry that preceded it. As Haikai grew in popularity, however, additional season words came into use. These poems' treatment of everyday life—religious festival, rice-planting, cherry-blossom viewing, and others— led to an even greater increase in the number of season words. Of course, botanical season words also grew as well. Glossaries of season words(Saijiki) illustrate that botanical season words have increased eleven-fold, larger than 6 for the total, during two hundred years. To demonstrate more closely these trends in the Edo Period, this study books at the botanical season words used by Basho, Buson and Issa, the three leading haiku poets of the time. From an environmental viewpoint, these changes point to several possible causes. One might be the passing attraction of certain plants, while others lost their popularity over the time. Another was the investigation on the familiar plants appreciated by Haiku in different countries. The answers were obtained from 68 people of 7 countries at present. This study will find important plants for the people in different climatic conditions.

In March 2009, the results of this research will be published in a version designed to educate the general population.